

日豪の海浜におけるレジャー空間形成の比較文化 —ブルー・ツーリズムの構築へ向けて—

東 美晴・小峯 力

はじめに

本企画はゴールを日本におけるブルー・ツーリズムの構築とそこにおけるライフセービングの役割について考察することに置いたものである。本稿では、手始めに、オーストラリアと日本の、レジャー空間としての海浜文化の形成過程に関する比較研究を行ってみたい。

日本の浜の対象としてオーストラリアを取りあげる理由は、日本のライフセービングが技術の向上や組織の整備を、オーストラリアとの交流を通して行ってきたことにある。また、オーストラリアのライフセービングは、サーフライフセービングと呼ばれる内水面ではなく海におけるライフセービングの技術を確立してきたこと、およびライフセービングの地位がオーストラリア文化を象徴するものの一つにまで高められている点が際だった特徴としてあげられる。

日本については、海浜文化形成の簡単な素描を試みるという意味で、東京からのゲストを受け入れてきた東京湾、相模湾、房総半島の海浜を取りあげる。

なお、ブルー・ツーリズムという用語は、1998年に策定された新・全国開発総合計画「二一世紀の国土のグランドデザイン」において、農村村のグリーン・ツーリズムに対し、漁村における開発方法として提唱されてきたものである（秋津, 2003; 196）。グリーン・ツーリズムは既に耳慣れた言葉となっているが、ブルー・ツーリズムはまだ馴染みが薄い。これは、グリーン・ツーリズムに関しては、既に様々な取り組みが行われ、その成果に関する報告も蓄積されてきたことにより、従来の観光産業の枠を越えた地域間の交流事業や環境保全運動と結びついた独自の領域としての認識が共有されるようになりつつある。一方、漁村や海浜の開発手法としてブルー・ツーリズムという言葉は既に10年近く前に登場していた。だが、従来の海水浴を中心とした海辺の観光産業から脱皮するほどのものの構築に至っていないためであろう。これについて、なぜ日本の海浜

においてオルタナティブ・ツーリズムとしてのブルー・ツーリズムが定着しにくいのか、レジャー空間としての海浜文化形成の過程を通して検討してみたい。

1. オーストラリアにおけるライフセービングとビーチカルチャー

(1) オーストラリア文化におけるライフセービングの位置づけ

オーストラリアのライフセービング100年史である*BTWEEN THE FLAGS*の第1章の冒頭は「ビーチへの愛はオーストラリア的生き方を明確に特徴づけるものである」という言葉から始まる。そして、この一節は「サーフライフセービングは、国家として連合し始めた20世紀前半に、オーストラリア人にユニークなアイコンと都市におけるレジャーライフスタイルを発展させる機会を与えてきた。その運動はオーストラリア人が大切にしている価値観、すなわちボランティアリズムとマイトシップを強化し、オーストラリアの環境とあいまって、独特のゆったりした感覚を導き出していった。」と締めくくられる。

オーストラリアにおいてライフセービング、とりわけサーフライフセービングと表現される海浜を舞台としたライフセービング活動は、単に救急救命活動を意味するのではなく、オーストラリアの文化的シンボルとして捉えられるものである。それはすなわち、以下のように表現される。

オーストラリア人が信じる多くの価値を体現するライフセーバーは国の特性そのものであった。サーフライフセービングの出現は、いつも分離される前の母国の方を見ていくということに変わり、オーストラリア人の革新者意識、すなわち物事を遂行する新たな方法を工夫することができる国民であるという意識を強化した。ライフセーバーの赤と黄色の帽子、赤と黄色の旗は、パトロールエリアを示すものであるとともに、それゆえに遊泳の安全を示すものである。これはそのビーチが特徴的にオーストラリアのものであり、他の海外の海浜リゾートをモデルにしたものではないということを示す、極めて印象的な表現となった (Jaggard, 2007;)。

(2) サーフライフセービングの形成過程

オーストラリアのライフセービングの歴史を理解するためには、「海水浴の歴史」を探る必要がある。オーストラリアの海水浴の歴史は、過去にオーストラリアがイギリスの植民地であったために、イギリスからの影響を強く受けていた。18世紀、イギリスでは、海水浴は健康のための娯楽として行われ、その思想はイギリスの医師の提言から始まった。当時、イギリスの医師は、冷水につかることによって得られる健康のおよび治療的効能を発表した。19世紀になると、イギリスでは海水浴に関するモラルの問題が

議論され始めた。あるグループが、「海水浴、特に公衆に肌をさらすという行為は、社会の秩序を乱すことである」と考え、水浴に反対するキャンペーンを行ったのであった。この価値観がオーストラリアにも移行し、大きな影響を及ぼすようになった。その結果、オーストラリアでは、1838（江戸後期）年、ニューサウスウェールズ州の各自治体ごとに、「水浴規則に関する条例」が制定されるまでに至った。その内容は、公衆のプール、海でのすべての水浴は、朝6時から夜8時まで禁止するというものであった。この社会的モラルの強要は、以後20世紀に入るまで続けられ、庶民レベルによる賛否両論の意見の衝突が続くのであった。その後、この条例は、ウィリアム・ゴッシャというある新聞の編集者によるデモンストレーションをきっかけに変えられていることになる。1902（明治35）年、10月、彼は、シドニーにあるマリンビーチで、首から膝までの水着を着て、毎週日曜日、3週にわたって意図的に海水浴を行った。彼のねらいは、彼のパフォーマンスを世間に宣伝し、水浴規制に関する条例を撤廃するため、法廷で争う機会を故意につくるということであった。このW.ゴッシャのパフォーマンスは、同じシドニーにあるボンダイビーチにも波及していった。しかし、このパフォーマンスを行ったW.ゴッシャは起訴されなかった。この時、W.ゴッシャのパフォーマンスに携わった警察官の裁量が、後の議会による条例廃止に大きな影響を与えることになった。最終的な警察官の見解は、「海水浴は適切な水着を着ている限り社会の秩序を乱すような行為ではない」ということであった。結局、このW.ゴッシャのパフォーマンスがきっかけとなり、1903（明治36）年11月以降、マンリーを始めとして水浴禁止条例は廃止されていった。水浴規則に関する条例が撤廃され海水浴が法的に認められた後、人々の間で海水浴の人气が急速に高まっていった。その反面、海岸における溺水事故が増加し、人命救助活動すなわち「サーフライフセービング」が重要視されるようになっていったのであった。そして、シドニーを始めとして、サーフライフセービングの必要性を訴えた世間の声は必然的に高まり、その結果、地域の海水浴場を単位とする民間主体の「サーフライフセービングクラブ」が、次々と設立されていった（小峯, 2002, 15）。

1907（明治40）年10月18日、シドニーで歴史的なミーティングが開かれた。シドニーにある11のライフセービング団体の参加によって開かれたそのミーティングでは、サーフライフセービングの「協会設立の必要性」が提案された。そして、そのミーティングでは「ニューサウスウェールズ・サーフベijing協会」という新団体の設立という結果を導いた。その後1910（明治43）年、この協会は「ブロンズ・メダリオン」というサーフライフセービングの救助技術を専門とした資格制度を導入した。さらに1911（明治44）年、この新団体の初代代表ジョン・ロードは、ニューサウスウェールズ州政府から「海水浴に関する調査委員会」の委員長として任命された。この調査委員会は「海水浴のスポーツ性」について調査し、州政府に対して調査報告およびいくつかの提案をした。この提案の中には、海水浴に関するルールづくり、またビーチインスペクター（ビー

チにおける指導、管理責任者)の任命などが含まれており、それらのほとんどは州政府によって受け入れられた。この州政府による承諾が、オーストラリアにおける「ビーチの安全管理義務」という概念の始まりであったといえるであろう。つまりビーチにおける安全管理という認識が高まり、その後州政府の援助を受けながら大きく発展していくきっかけになったのである。さらに、州政府にサーフライフセービングの必要性を認めさせたこのプロセスは、民間レベルのライフセービングを州政府公認による道徳的拘束力をもつ活動に変えたといっても過言ではない(小峯, 2002; 16)。

(3) サーフライフセービングとビーチカルチャー

ここでオーストラリアでは、どのクラブが最初に設立されたのかという議論がある。この議論はサーフライフセービングの性格を考える上で興味深い。

2つのクラブが、最初のライフセービングクラブとして名乗りをあげている。「ボンダイ・サーフベイザーズ・ライフセービングクラブ」(現ボンダイ・サーフライフセービングクラブ)は、1906(明治39)年設立、また「ブロンテ・ライフセービング・ブリゲード(現ブロンテ・サーフライフセービングクラブ)」は、1903(明治36)年に設立されたとそれぞれの歴史を主張している。名前にある「サーフベイザーズ」とは海水浴をする人、また「ブリゲード」とは「団体、隊」という意味である。一般的には、1906(明治39)年2月に設立されたボンダイ・サーフベイザーズ・ライフセービングクラブが、最初のサーフライフセービングクラブであるとされている。その論議の理由は、クラブの名称にあったようである。クラブ名に「サーフ」と「ライフセービング」という両方の言葉が使われていたクラブは「ボンダイ」が最初であった。この頃、「サーフクラブ」や「ブリゲード」という名称でありながら活動としてはサーフライフセービングを行っていたクラブもあったようである。いずれにしても、これらのクラブの名称から、オーストラリアのサーフライフセービングは、地域に根ざした民間のクラブ活動から始まったということがわかる。その代表的なクラブの一つに「マンリーサーフクラブ」がある。マンリーサーフクラブは、1907(明治40)年に設立されたクラブで、後に「マンリーライフセービングクラブ」へと分割されたクラブである。現在、マンリーライフセービングクラブは、オーストラリアのクラブの中で唯一「サーフ」という言葉をその名称に含んでいない興味深いクラブである。「マンリーサーフクラブ」から「マンリーライフセービングクラブ」へ分割された理由は、それらの設立経緯および相違を明らかにすることによって推測できる。1907(明治40)年当時、マンリーサーフクラブの主な設立目的は、遊泳者のためにクラブ施設を提供し、また救助器具を供給することであった。しかし、当時600人いたクラブ会員のうち、純粋にライフセービングを行っていたのは100名程度であった。他のメンバーは、クラブ施設を利用しての海水浴、およびクラブ会員の間での社会的交流だけを目的としていた。しかもクラブのリーダーは

クラブハウスの建設をマンリー市に強く要求し、もしそれが断られたら、クラブはライフセービング活動を放棄すると交渉したのであった。このことが、クラブ内で純粋にライフセービングを行っていた特に若い世代のメンバーからの信用を失わせた。その結果、1911（明治40）年、この意見の相違が基で、クラブは分裂市マンリーライフセービングクラブの設立に至ったのであった。マンリーライフセービングクラブの設立目的は、マンリーサーフクラブとは異なり、純粋にライフセービングを行うこととし、ただ単にクラブの社会的な面を楽しむためではないということであった。この経緯が、クラブ名にサーフが含まれていない理由であると考えられる。すなわち、クラブの目的をライフセービングのみに強調し、さらに単に社会的交流だけを目的としたサーフクラブとの区別をはっきりさせるためにクラブの名前に「サーフ」を含ませないで「ライフセービングクラブ」としたと考えられる。現在ではマンリーライフセービングクラブだけがその活動を続けている（小峯, 2007: 16）。

(4) まとめ

以上から、簡単にオーストラリアのライフセービングの特徴をまとめる。

まず、民間のライフセービング団体は、もともと「遊泳者のためにクラブ施設を提供し、また救助用具を供給する」ことから出発している。これはオーストラリアの海水浴がシドニーを代表とする都市住民のクラブスポーツとして出発、定着したことを示している。当然クラブ側としてはメンバーである遊泳者の万が一に備え救助器具を備えることは必要であるが、それ以上に海水浴のスポーツとしての組織化（ルールと、ルールに従った技術の確立）がライフセービングに集約されてきたとみることができるであろう。

次に、ライフセービング団体は、州政府の援助を受けながら、ビーチの管理責任者として発展していく。水難事故防止、救助に対する英雄的貢献のエピソードを重ねるうちに、オーストラリアのビーチおよびオーストラリアそのもののよき文化のシンボルとして認識されるようになっていったと言えるであろう。

2. 近代日本と“ハマ”空間

本章では、東京から出かけていくことを念頭に、レジャー空間としての浜がどのように形成されていったかを整理する。第1節では明治20（1887）年前後から上流階級の保養地として登場する大磯および湘南海岸を、第2節では明治期から大正期にかけて庶民の海浜のレジャー空間が隅田川から東京湾に移る過程を、第3節では戦後1960年代に巨大な海水浴・観光地となっていく九十九里浜について示す。

(1) 大磯から房総へ

大磯海岸は医師の松本順によって1886（明治19）年に開かれた海水浴場である。同じく相模湾に面する葉山はイタリア駐日公使マルチーノとドイツ人医師ベルツによって見いだされる。当時、気候療法の一環として海水浴が取り入れられることにより、鎌倉、逗子、江ノ島など相模湾沿いの海浜地域は上流階級の別荘が並ぶ保養地となっていた（東, 2004; 30）。

ここでは、まず大磯の賑わいの跡をたどる。

1888（明治21）年7月24日の日日新聞には、以下のような記述が登場する。

「大磯の海水浴は大流行となり土曜日の晩より日曜に掛け一日の閑を愉しみて放養せんと出掛くる者多く去る二一日の夕などは浴客輻輳して宿屋という宿屋は残らず塞がり素人屋までも頼まれて余儀なく宿を貸す有様なりきしたがって角力もあり手品もあり頗る駅中は賑わえり……（高橋, 2007; 95）。」

家庭史年表には、同年8月11, 12日（土・日）にかけて、「鎌倉・江ノ島・箱根などへ遊覧客が押し寄せる。この頃から週末のレクリエーション避暑が広がる」と記述されており、その様子は上の日日新聞の通りであったのだろう（下川, 2000; 181）。

また、翌1989年8月1日の朝野新聞には記述は以下の記述がある。

「頃日大磯に滞留する旅客中には官吏学生の種類が多く、殊に驚くべきは婦人連の大胆にも浴場に遊泳し、……妻君令嬢並びに女教師女生徒らしき連中が、身に薄き金巾の西洋寝巻を纏い、首に大なる麦藁帽子を冠り、三々五々相携えて余念もなく海中に遊び戯むる事なり（高橋, 2007; 100）。」

子供史年表の同年の記述には、「神奈川県・大磯海岸で水着姿の婦人が話題となる。婦人の海水浴流行」とあり、女性の海水浴が驚くべき出来事として記録されたことがうかがわれる。いずれにしても、この時期大磯へ海水浴に訪れた人々は、自らの別荘を持たないにしても「官吏学生」「細君令嬢並びに女教師女生徒」といった人々であった。

その後、大磯はさらに賑わいを増していく。1895（明治28）年には大磯の海水浴場に5万人以上の人出があったと記録されている。1898（明治31）年8月の新聞記事の見出しには「大磯海水浴場の女王」というものが見られる。

青木はこの記事について、「水着の美人コンテストでも開いたのかと思ったが、これは新しい物好きの連中が西洋の真似をして、海水浴に来ていた女性の中から勝手に「クイン」を選んで騒いだけのことであった。もっともこれも、「クイン」に選ばれたのは銀行の令嬢であり、大衆とは無縁の避暑地のできごとであった（青木, 2004; 194）。」と記している。

1899（明治32）年には、大磯海水浴場の海開きが記されている。その様子は水泳競争、曲泳数種、花火、大神楽、芸者の手踊りなどが催され、なかなか盛大であったという（青木, 2004; 201）。

青木によれば、既に東京付近の海水浴場としては、金沢、横須賀、三崎、逗子、鎌倉由比ヶ浜および七里ヶ浜、片瀬、江ノ島、鵠沼、茅ヶ崎、大磯、国府津、小田原、熱海、戸田、稲毛、館山、保田、白浜、犬吠埼、大洗などがあったが、たとえば大洗までの鉄道運賃は1円50銭、宿泊に35～50銭必要であり（次節に示す大森海岸では、1906（明治39）年時点で5～10銭で十分であった）、庶民には手の届かない場所であったという（青木, 2004; 201）。

大正年間になると、一夏の人出だけではなく、休日となった一日の人出も記録されるようになる。1914（大正3）年の7月26日に湘南方面へ出かけた人は鎌倉629人、藤沢387人、逗子362人、平塚297人の合計1738人（もちろん全てが海水浴客とは限らない）であるが、1916（大正5）年には臨時列車が出されるようになっており、1923（大正12）年の7月17日は大磯の海水浴場だけで1万人を越える人出になっている。そして、1925（大正14）年には神奈川県のコーストに訪れた海水浴客の数は7月末の10日間のみで18万人となっている。

また、1913（大正2）年7月5日の読売新聞の記事には、「去年まで海水着は男女ともメリヤスばかりだったが、今年婦人用にはアルパカ、キャラコがよく売れている。令嬢用には紺が大流行。海水帽は、いままでの手拭いの頬被りか、大きな麦藁からゴム製の海水帽に。今年の新製品でおもしろいものは海水靴。白いズックに防水液を塗った半靴」と、水着に関する流行も紹介されるようになっており、海水浴の普及が理解できる（高橋, 2007）。

なお、大正年間に入ってから、1914（大正3）年の記録では勝浦に235人が訪れている（青木, 2005; 54）。1921（大正10）年には房総の勝浦で2600人が宿泊、1923（大正12）年には「房総の海辺は大賑わい」等、記録されている（青木, 2005; 192, 229）。このように、湘南海岸の他に房総へ出かける人が多くなることが読みとれる。これは1913（大正2）年に外房線が勝浦までの開通することによって、房総半島が湘南海岸に次ぐ、避暑・海水浴の場所と位置づけられるようになったことを示している。湘南と房総の違いは、1922（大正11）年時点では、「湘南地方は上流階級の人々、房総は中流以下の人々や書生」が訪れることが多かったという（青木, 2005; 213）。

表 大正期の海水浴場

年	トピック
1914	7月26日(日)新橋駅や両国駅の乗車客数は、鎌倉629・藤沢387・逗子362人・平塚297・勝浦235など合わせると3000人を越える。
1916	湘南地方に土日月曜、東京発臨時列車1本
1920	日曜日と定休日が重なった8月15日、午前7時頃から8時40分までに湘南方面へ向かう5本の列車に4000余りが乗り込み、鎌倉・江の島へと向かった。
1921	湘南方面へ向かう東京駅、房総方面へ向かう両国駅の乗降客は前年の2倍に増えた。房総の勝浦町では、人口数と同じ2600人が避暑で宿泊したという。
1923	7月17日大磯 海水浴場は1万人の人出 8月5日「房総の海辺は大賑わい」(五日付時事)、東京から泊まりがけで海水浴に出かける人が増えた。数万人が訪れたために、海辺の旅館が満員で泊まる場所もないというありさま。「海へ行く列車は鯨詰め 苦熱の都会を免れる人で大混乱の両国駅」、平日でも一万人以上の乗客があり、前年の倍以上のこと。 8月14日「避暑に行くのか、蒸されに行くのか、湘南も房総地方も」稲毛から先の避暑地には2万人前後滞在しているが、旅館は少なく、皆貸間や貸家を利用していた。次の週も新聞は、「避暑に行くのか、蒸されに行くのか」と続く。湘南地方は上流階級の人々、房総は中流以下の人々や書生で混雑していると、東京の人々のレジャー動向を報じている。
1925	この夏、8月の半ばを過ぎても、海水浴場はどこも賑わった。7月の末、鎌倉や磯子など神奈川県内の海水浴場の利用状況が示された。10日間で海水浴客は18万人。

出典：青木、2007『大正ロマン 東京人の楽しみ』中央公論社

(2) 隅田川から東京湾へ

日本における海水浴および海水浴場の系譜は、上流階級のリゾートに端を発し普及していったという単純な図式には当てはまらない。明治期東京の庶民は上流階級以上に気軽に隅田川などで水浴を行っていた。都市化の進展により、川での遊泳が禁止され、水浴の場所が海へ移されていくという系譜も取り出すことができる。

また、日本においてレジャー空間としての水辺の利用は、すでに江戸期には確立されていた。隅田川などの河原が見世物や芝居小屋が並ぶ恒常的な祝祭空間として賑わっていたことは説明を必要としないであろう。海および浜は、海水浴に先立ち、潮干狩りを通して、日本的レジャー空間として構成されていくことになる。

① 庶民と遊泳

1872(明治5)年7月4日の日々新聞には以下のような記述がある。

三日より、東京育幼社の水遊稽古が始まる。幼童五〇余名がおなじ浅黄木綿の筒袖股引を着て紅色の旗を押し立てて府庁で知事に挨拶したあと、浜殿水および場所に向かったのは勇ましい光景だった(高橋, 2007)。

また、1877(明治8)年7月には読売新聞に「築地引合橋の遊泳場は日々に盛りて、島田髪の娘も泳ぐ」との記述がある(青木, 2004)。

青木によれば、水泳は娯楽というよりも、江戸時代からの兵法の一つとして政府が奨励し、それを民間が受け、公有水面の拝借許可を得て水泳道場を開設、一般の人にも広

まっていたという（青木, 2004; 48）。これに先立つ1872年の記述もやはり兵法の名残を感じさせるものである。なお、築地引合橋の遊泳場で泳いでいた女性は、下女と一緒に島田髪でちりめんの肌着を着て、という様子であった（青木, 2004; 49）。下女を連れてというあたり、前述の大磯の海岸で泳ぎ始めた「細君令嬢、女教師女生徒」が明治期に形成された上流階級に属するのとは異なり、江戸期から連続したある程度富裕層の娘であったのだろう。

この後暫く、庶民の遊泳に関する記述は途絶える。再び登場するのは、1906（明治39）年8月都新聞の「大森八幡浜、海水浴で賑わう、浜茶屋5銭・風呂10銭、浮き輪を貸すところもある」という記述である（青木, 2004）。青木はこの記事の解説として、当時の海水浴場の様子を以下のように記す。

海水浴場は、海中に紅白の旗を立てて、区分されており、海岸に座敷を設け、海水浴や温浴をさせた。海岸亭や掛茶屋の料金は、一人5銭、弁当を持っていけば10数銭で俗塵を洗うことができた。茶屋では、浮輪を貸すところもあって、海水浴が大衆のレジャーとして浸透しはじめた（青木, 2004; 246）。

この記述から、当時の海水浴場が、前述の築地引合橋の遊泳場と同様に公有水面を借り受けて営業を行うものであることが推測できる。同時に、海水浴場の営業主は、海岸亭や掛茶屋など、浜に座敷を設けて飲食を提供したり、浮き輪を貸したりしていたことがわかる。これらから、現在の海水浴場における海の家形態は、この時期の浜茶屋を原型にしていることが想像できる。

この間、河川の遊泳場の営業は途絶えていたわけではない。むしろ、水泳の普及に伴い、より多くの遊泳場が必要となったため、東京湾の浜辺が開拓されていったのであろう。実際、1915（大正4）年の記述には、大川端には遊泳場が50軒存在しており、むしろ盛況であったと記されている。1916（大正5）年の記述には、浜町河岸には、流派の紋所を染め抜いた幕を垂らした、明治時代から続く修武流や水府流というような、いかめしい名前の水泳場が6ヶ所あり、一日に200名近い人が泳いでいたという。しかし、1917（大正6）年、水質の悪化により隅田川での遊泳は禁止されていく。といっても、浅草より上流ではまだ利用されており、向島の言問では小学生が泳いでいた。ただ、「川底にヘドロが溜まっていて、生徒が丸太につかまって両足をバタバタさせると、水が真っ黒になって白い禪がどす黒くなるほど」の状態であった（青木, 2005; 112）。

一方、海水浴場では1912（明治45）年に新子安の海水浴場の名前があがっている。大々的に海開きを行い、水神祭や模範水泳、明治座盆興行出勤の俳優による仮装行列まで催したという（青木, 2004; 284）。これ以外には、当時の東京湾の海水浴場としては、月島、芝浦、大森、羽田などの名があがる。千葉の稲毛の名前も出てくる。

大正期に入ると、東京湾の海水浴は活況を呈してくる。1915（大正4）年頃には、商家の藪入りに、小僧さん達が月島から品川・大森・新子安あたりの海水浴場へ出かける

ようになったという。1916（大正5）年の記述からは、それぞれの浜にどれぐらいの海水浴場があったかがわかる。月島には三号地に6ヶ所、一号地に3ヶ所の水泳場があり、三号地の無料水泳場の隣で大日本水泳講習会が花火を数十発打ち上げる、大森には料理屋が経営する複数の水泳場や臨時に作られた水泳場等が合わせて17あったという。さらに1917（大正6）年には、月島（3号地）だけでも5万人の人出があったと記されている（青木, 2005; 69, 91, 112）。

1919（大正8）年の記述から、当時の海水浴場の様子を抜き出しておこう。月島の場合、水泳場の大きさでは、従来のものは間口9間半（約17m）奥行6（約11m）であったが、新規は間口5間一尺奥行6間となった。飲食店ができたため、この年から水泳場内での飲食物の販売は禁止される。これ以前は、飛び込み等のために水面に櫓を建てていたが、櫓の建設も禁止されたという（青木, 2005; 154）。1882（明治15）年に開設された築地引合橋の遊泳場は間口20間であった。これと比較すると、個々の業者が借り受ける水面面積は遙かに小さくなっている。ここから、1919（大正8）年時点では、限られた公有水面を多くの業者が分け合うような形で海水浴場が設置されていたことがわかる。

さらに1921（大正10）年には、遊園地とセットになった海水浴場広告、遊泳場行きの電車割引切符などの登場が記述とともに、京成電鉄による稲毛海岸への海水浴場開設が記されている（青木, 2005; 191）。海水浴の浸透がレジャー産業の形成に結びついていく様子が理解できる。

② 潮干狩りと東京湾

海水浴が活況を呈する以前、潮干狩りが春の海のレジャーとして定着し始めた。

この時期の潮干狩りは江戸時代から続いた行楽であり、干潟に残された魚や蟹などを拾い、それを船頭等に料理させて味わうというものであった。現代のように干潟となった浜辺で貝を拾うのではなく、遠浅の東京湾にできる島状の干潟へは船に乗って渡った。その場所は芝浦、高輪、浜離宮下、深川越中島、州崎沖、品川の台場などであった（青木, 2004; 225）。

また、潮干狩りは賑やかさにおいて花見と並ぶような行楽であり、1901（明治34）年の記述には、「三味線や太鼓を持ち込み、馬鹿囃子や滑稽踊りを演じながら品川沖に押し出す者もあった。獲物が少なかった割には、幾百隻もの船が出て賑わった」とある（青木, 2004; 213）。この後、新聞紙上には、毎年、潮干狩り船の値段や貝が豊富かどうか記されている。

大正期に入ると、潮干狩りは一層の盛況ぶりを見せる。1919（大正8）年4月3日の様子は次のようである。

神田・深川方面から五色の旗を翻して、鉦や太鼓の鳴り物入りで繰り出したのをはじめ、品川沖だけでも8,000余隻の船が出た。大変な人出の割に“さしたる出来事はなかつ

た”とあるが、泥酔して溺死した人が1名・迷子52名・喧嘩20組もあった（青木, 2005; 151）。

明治期の記述と大正期の記述を比べると、出た船の数が一桁違っている。盛大な祭りといってもよいほどである。1925（大正14）年の人出はさらに凄まじい。4月20日付の東京朝日新聞の見出しでは「東京が留守になるほど 出るも出たり二百万人」となっている（青木, 2005; 226）。なお、潮干狩りには手漕ぎの伝馬船、荷足船などが使われてきたが、大正末にはモーター付きが登場している。

ところで、1878（明治11）年5月には読売新聞に「深川と佃島の漁師が船祭、品川の台場近くまで出て飲めや歌えの大騒ぎ」という記事が出ている（青木, 2004; 64）。明治34年に幾百隻、大正8年に8,000余隻もの潮干狩り船が出るためには、東京湾にそれだけの船がなければならない。明治11年に大騒ぎをした深川や佃島の漁師たちはその担い手であっただろう。また、川に目を向けると、明治、大正期には、春の花見や夏の川開きの花火にも川に船を出して見物するものであり、船宿も少なくなかった。さらに『子ども史年表』には、1916（大正5）年11月の記録として「東京での水上生活者の子弟の不就学が問題化。東京の水上生活者は約3,000世帯、ただし子どもの数さえ不明で不就学」がある（下川, 2002; 316）。明治、大正期における潮干狩りなど、庶民の水辺のレジャーがもともと水の上を生業の場としていた多くの人々の存在によって支えられていたことにも目を向ける必要があるだろう。

(3) 九十九里浜とイワシ漁

明治期から大正期にかけて湘南海岸、勝浦など南房総が上中流の海水浴場として発展したことに對し、上総の稲毛に至るまでの東京湾は庶民向けの海水浴場が設置されていった。いわば、海水浴を通じた海浜のレジャー空間化は上記のような形で進行したのである。

九十九里浜、特に北総に近い側は房総半島にありながらも、その海浜のレジャー空間化が最も遅れた地域であろう。これは、江戸期以来、九十九里浜では鰯漁が行われていたことに起因する。鰯は干鰯、鰯粕などに加工され、肥料として関東の農村はもちろん、関西にまで運ばれていた。干鰯、鰯粕は金肥とされる貴重な肥料であり、その生産は江戸期においては一大産業であった。東浪見村の大東岬から銚子の犬吠埼までの間に、網主300余家、漁業従事者4万戸があったという（鈴木, 1985; 50-51）。

ところで、唐木専爾の『海と人生 房総沿岸23年』において、1969年の九十九里に与えられたタイトルは「オッベシ・女漁師・ジリ貧・民宿」である。

九十九里は銚子との関係でいうと、砂浜の九十九里が大地引網、岩石海岸の調子は八ツ手網を使い、鰯漁を行っていた。江戸期の網元の数は九十九里の三百軒に對し、銚子は数十軒であり、明らかに九十九里の鰯漁が優位にあったことがわかる。しかし、明治

になり、アグリ網が導入されると、漁船の大きい銚子が優位となった。港がなく、浜から船を押し出す九十九里浜は、漁船の大型化ができず、ジリ貧に追い込まれていったという（唐木, 1993; 106）。

唐木は二次大戦後鰯の不漁期に入っていたことも指摘しているが、これ以外にも化学肥料の登場により干鰯・鰯粕などの肥料産業そのものが衰退していったことなどもあげられるであろう（唐木, 1993; 104）。だが、砂浜の九十九里が他の漁業に転換できなかったことは容易に推測できる。

唐木の1969年のルポルタージュは鰯漁の最後と、浜の観光産業への転換を映し出している。

オッペシとは、港のない九十九里において浜から船を押し出す仕事に従事する者をいう。男が船に乗り漁に出る船方をつとめるのに対し、オッペシの多くはおんなたちであった。唐木はオッペシが船を押し出す様子を以下のように記述する。

このあたりの浜では、この十年間に十人が、船の出し入れで死んだという。戦後数年間はまだエンジンのない船で、五、六十人がゆっくり押した。いまは助力とロープを使い、押し屋のオッペシは、船の下へまくら木を入れるだけだ。しかし船の大型化、出し入れのスピード化で危険が増した。作業をみていると、十数人のオッペシはコマネズミのように動き回る。船上の漁師がどなる。毎日同じことをするのに、波や風で状況が変わる。冬の寒い朝は、たき火にあたっても、手がしびれる。冬の海は鍛えられたオッペシでも泣きごとをいいたくなる。夏になると、中年のオッペシは上半身はだかだ。浜を走り回るに十数人の中に、身重の若妻が二人いた。「流産するような弱い女は一人もいねえよ」中年のオッペシがいった（唐木, 1993; 105）。

1969年、昭和44年の日本において、上半身はだかの逞しい女達が船を押し、浜を走り回る。近代化のためにかえって危険な作業となっていた。だが、同年漁港の完成により、この風景もなくなる（山本, 1999; 165）。古い浜の文化の最期の姿である。同時進行で、観光産業への転換も進む。鰯の地引網漁は観光地引網に変わる。

とれても、とれなくても、ひと網二万円。九十九里の観光地引網は、物珍しさから、いまのところは売れっ子である。九十九里町や蓮沼村の海岸では、団体客の注文で長さ七百メートルもの網を張る。引き手は漁師十人、カーチャンたち二十人ぐらい。「カーチャンの小ばやしや民謡がおもしろい」と客は喜ぶ。えものはイワシ、イシモチ、セイゴなど。二、三百匹しかとれないこともある。そんなときは小魚一匹が百円につく計算だ。元漁師で、いまは水産加工場で働くAさん（五三）は「このままだと評判を落として自滅だ」と批判する。地引網は本来、魚がピョンピョンはねている海面を囲むものだ。

観光地引網はただ沖へ出て網を入れてくるだけ、六十分二万円なりのショーにすぎない。この夏、ひと網でトラックに積むほどとれたのは五、六回だろう。網の親方のひとり鈴木仙吉（四五）のいいぶん。「漁が少ないときは正直、つらい。しかもこの浜は遠浅で、魚を飼っておくイケスがないので、不漁のときイケスの魚を代わりに出すという手当てができない」網を引っ張って引く漁師の日当は二千元、女は八百円だ。カーチャンたちは船に乗れないので、これだけの差がつく。三十人の日当は三万六千元。一日二回以上網を引いてもらわないと、親方は損をする。しかも、漁期は四月から十月までだが、客がよくくるのは真夏の四十日間だけである（唐木, 1993; 109-110）。

1969年、すでに九十九里浜中央部の片貝には、民宿が七十軒になっていた。ある7月の日曜日、片貝海岸の海水浴客数は概数で13万人であった。客のほとんどがマイカーでやってくる。唐木はこの節を「一大観光地に変容しようとしている漁師町では、車の交通はもちろんのこと、人間関係まで、まだまだ混乱と小さなトラブルを繰り返さねばならないだろう」と結んでいる（唐木, 1993; 113）。

なお、この時期千葉市の稲毛海岸は埋立てが始まり、住宅団地へと変容しつつあった（唐木, 1993; 149）。戦前まで庶民のレジャー空間であった東京湾の浜が埋立てによって産業空間に変容するのと入れ替わりに、それまで産業空間であった九十九里がレジャー空間へと転換を迫られた時期であったのだろう。しかし、唐木が再度ルポルタージュを行う1992年には、快適なリゾート施設が求められる時期にかかっており、80年代の中葉には百軒を越えた片貝の民宿も、廃業、休業により50軒を割るところまで落ち込んでいた（唐木, 1993; 30）。一方、一旦海を失った稲毛海岸は人口浜の整備により、ウインドサーフィンのメッカとなっていた（唐木, 1993; 64）。

3. まとめ

オーストラリアと対比しながら日本の浜を考えると、いくつか興味深いことに気付かされる。

オーストラリアのビーチは、マンリーのビーチに見られるように、泳ぐことを目的としたサーフクラブの設立により、ようやく人との関わりが始まる。一方、日本の浜は、東京湾において潮干狩り船に客を乗せていた漁民や九十九里浜において鰯漁に従事していた漁民など、多くは既に人がそこでそれぞれの生業の従事する空間として形成されていた。江戸期に始まった水辺の行楽は、水辺あるいは水上で暮らす人々の存在によってささえられていた。この意味で、水辺の行楽も水辺あるいは水上生活民の生業の一環として組み込まれていたといえる。

海浜と人との関わりのある方は、その景観を規定する。公共水面として保全される

オーストラリアのビーチには無駄な構築物はない。しかし、日本の浜は、そこを生業の場とする人々が、海水浴場の経営を新たな生計の手段としていく。明治期の東京湾に面した海水浴場では、分割した公共水面を借り受け、そこに旗や櫓を建て海水浴場とし、浜辺には水浴客の休憩所として浜茶屋や海の家を設置する様子が見られた。このようにして、浜辺に海の家が並ぶ、日本の海水浴場の景観が成立する。大正期には、大資本の鉄道会社さえ、海水浴と海を家の経営に参入してくる。さらに、1969年の九十九里では、観光地引網という形での従来の漁業から観光漁業への転換が見られた。日本の海浜は、オーストラリアの海浜と異なり、そこでレジャーを楽しむ人が構築したレジャー空間ではなく、レジャーを提供する人によって構築されたレジャー産業空間として形成されてきたのである。これは、現代において、ブルー・ツーリズムが提唱はされてきたものの、根付きにくかった土壌を形成するものであろう。

また、レジャーを行う主体における、そのあり方の違いも際だっていた。オーストラリアのライフセービングはレジャーというよりもむしろスポーツを基盤としている。スポーツを楽しむ人々がその安全も自分たちで保証するという考え方から登場している。それゆえに、安全管理や事故予防が重視される。また、ライフセーバーはアマチュアであり、プロのライフガードとは区別される。ライフセーバーのレスキュー活動はボランティアである。そのために、ライフセーバーの行為と精神の崇高さが、オーストラリアの良き文化の象徴として位置づけられる。一方、日本における海浜および水辺のレジャーは、祝祭性をその特徴としてあげられるであろう。潮干狩りに「三味線や太鼓を持ち込み、馬鹿囃子や滑稽踊りを演じながら品川沖に」出る者、「水神祭や模範水泳、明治座盆興行出勤の俳優による仮装行列まで催した」海開きなどは、その様子をリアルに示すものである。現代においてはバーベキュー、ビーチバレー、花火（昔からである）に変化したとしても、相変わらず夏の海辺は一時の祝祭空間であり、それゆえにこそ大量の人々が浜辺に押し寄せ続けたのであろう。

なお、日本人が海水浴を祝祭として位置づけてきたことは水の事故の多さにもつながっている。もともと安全にレジャーを楽しむことよりも、はしゃぐことに重点が置かれているのだから当然であるが、1919（大正8）年の潮干狩りのトラブル「泥酔して溺死した人が1名・迷子52名・喧嘩20組」などは、そのスタンスをよく現している。実際、大正期、東京湾の海水浴場では多くの水の事故があった。1918（大正7）年8月、芝浦では激しい潮流の変化のため、毎日のように溺死者が出て260名以上となった（青木、2005; 135）。1921年8月には、月島、千住、深川で合わせて40人が水死している（青木、2005; 192）。時代を下り、戦後の九十九里浜でも、1963（昭和38）年7月21日に一日に11人の水死者を出している（唐木、1993; 113）。突然の大波によって200人以上が海に流されたにもかかわらず、ライフセーバーの尽力によって5名を除き全員が救助された1938年2月のボンダイビーチのブラックサンデーに比べると、なんとも無防備な印象を

受ける。

最後に、日本には多様な浜があり、本稿に取りあげたものだけで海浜文化の形成を語るものではない。しかし、日本におけるブルー・ツーリズムとライフセービングを考える上での初歩的基盤を準備するという目論見はある程度果たせたと考える。

参考文献

- 青木宏一郎 2004『明治東京庶民の楽しみ』中央公論社
2005『大正ロマン 東京人の楽しみ』中央公論社
- 秋津元輝他 2003「開発の功罪—発展と保全の相剋」『観光と環境の社会学』古川彰他編, 新曜社
- 東 美晴 2004「明治期におけるリゾートの形成—海水浴の普及に着目して—」『流通経済大学社会学部論叢』Vol.15, No. 1
- 唐木専爾 1993『海と人生 房総沿岸23年』崙書房
- 小峯 力他 2002『ライフセービング 歴史と教育』学文社
- 鈴木久仁直 1985『利根の変遷と水郷の人々』崙書房
- 下川耿史 2000『明治・大正家庭史年表』河出書房出版社
2002『近代 明治・大正編 子ども史年表』河出書房出版社
- 高橋靖子 2007『年表 近代日本の身装文化』三元社
- 山本鉦太郎 1999『房総の街道繁盛記』崙書房
- Jaggard, ED 2007 *BETWEEN THE FLAGS; on hundred summers of Australian surf lifesaving*, UNSW PRESS